
騎士道精神

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

騎士道精神

【Nコード】

N2563P

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

貴族階級にいる保守政治家ロットナー氏はとかく頑固で融通が利かない。その彼が日本に来て。現代に騎士道精神の持ち主がいたらどうなるかを想像しながら書きました。

第一章

騎士道精神

ロビン＝ロットナー卿は貴族である。爵位は伯爵だ。

その誇りを常に胸に抱いている。

仕事は政治家であるが元々スポーツマンでラグビーをしていた。

ラグーマンとしても有名でありオックスフォード時代はそちらでも有名な人物である。

しかしである。この彼はだ。非常に古い人物として知られていた。

「もう二十一世紀なのにな」

「全く。古いつていうかね」

「本当にな」

周りは彼を苦笑いと共にこう評する。

「今時騎士も何もないだろう」

「ドン＝キホーテみたいだよな」

「そうだよな」

これが彼への評価であった。

「まさに現代のドン＝キホーテだよ」

「ああいう御仁がまだいるのって我が国だけだよな」

「ああ、それは間違いないよな」

「イギリスだけだ」

「だからか？」

そしてだ。こんな言葉が出るのであった。

「我が国がアメリカや中国や日本に遅れを取るようになったのは」

「ヨーロッパの中でもドイツやフランスに押されてるしな」

「大英帝国も今は昔だしな」

歴史の流れはだ。これはどうしようもなかった。

「けれどあの方だけは相変わらず」

「正々堂々と騎士道だ」

「それで政界も国際社会もやっていこうとする」

「本当にドンキホーテだな」

「そうだよな」

こう言われていた。その彼はというとだ。

こうした話を聞いてもだ。全く意に介さない。こう言うだけだった。

「言いたい者には言わせておくのだ」

「はい、わかりました」

執事のアルマーは彼に長年仕えている。姿勢のいい端整な執事だ。もう髪は白髪だがそれを丁寧にもオールバックにしている。

ロットナー卿もブロンドに黒が入ったその髪を丁寧に後ろに撫でつけている。そして彫が深い整った顔をしており口髭をたくわえている。目は青で強い光を放っている。

常にスーツを着ておりフロックコートも愛する。ラグビーをやっていたことがすぐわかる長身で引き締まった身体をしている。彼は今日も議会で言う。

「その様なやり方は卑怯である」

母国の通商政策についての議論の時の言葉だ。

「それは我が国の名誉を傷つけるものであるから私は反対する」

「いや、そうは言っても」

「それでも」

「ここは」

その彼に対してだ。相手だけでなく彼の所属する政党の間からも戸惑いの声があがる。彼が所属しているのは保守党である。実に彼らしい。

「それが一番でしょうに」

「それに外交ではやはり駆け引きは必要だ」

「この位はいいのでは」

「取引材料としては」

「弱みに付け込み我が国の商品を高く売ろうというのはだ」

確かにどの国でもやっていることではある。アメリカや中国に至ってはこれどころではないかも知れない。それが政治というものである。

「騎士道に反する」

これを聞いてだ。皆思った。

「またか」

「またそれが」

「騎士道か」

いささか呆れた。しかし彼は本気であった。

「相変わらずだな、全く」

「それを出すか、ここでも」

「それで言うのか」

そしてだ。彼はそんな周囲に構わず言うのであった。

「ここは売るべきではない」

「ではどうするのでしょうか？」

相手の労働党から意見が出た。

「ここは」

「どうしてもというのなら安く売りだ」

そうせよというのである。

「そしてかの国が今の様に窮状に陥っていない時に売るべきだ」

「それでは国益を損ないますぞ」

その労働党の議員は政治の本質を出した。

第二章

「それでもなのですか」

「左様、国益とは何か」

ロットナー卿はこのことについても話した。

「それは何であるか」

「何であるかですか」

「では何と言われるのでしょうか、ロットナー卿は」

「国家の名誉を守ることであります」

それだとだ。質問に答えたのだった。

「だからこそ。ここは正々堂々とです」

「やれやれ、それだと利益があがらないぞ」

「ただでさえ今我が国は苦しいというのに」

「全くだ」

イギリスだけでなくEU全体がだ。アメリカや日本など問題にならない位苦しい。二十世紀の世界恐慌に匹敵するとまで言われている状況だ。

しかも今のイギリスはあの時のイギリスとは違っていた。植民地を持っていない。自分達だけの市場を持っていない。ブロック経済も不可能になっていた。

だからこそ彼等も必死だった。それで中東のある国に対して英国の商品を高く売ろうとしていた。その国の足元を見たうえで、である。

ところがロットナー卿はそれを卑怯としてだ。今議会で言っているのである。誰もがこのことに辟易してしまっている状況なのである。

そして結局だ。この話はイギリス国民の耳に入りだ。議論になった。

「ここはロットナー卿が正しいだろ」

「なあ」

「アヘン戦争とかみたいなのは後で言われるからな」

「そうだよな」

そうしてこつも話される。

「ここは売るべきじゃないな」

「止めておくべきじゃないのか？」

「そうだな」

しかしであった。反論もあった。

「いや、政治つてそういうものだろ」

「国益重視だ、国益をな」

「だったら今は売るべきだろ」

「我が国もとにかく大変なんだぞ」

国益重視派の言葉である。

「そんな古い正義を言つていられるものか」

「戦争を売るわけでもその国を侵略する訳でもないんだぞ」

「だったらいいじゃないか」

「その通りだ」

こつした意見であった。結果としてこの話は国を二分する議論になつてだ。イギリスはそのことで動きが取れなくなつた。その結果、

その国にはだ。アメリカなり中国なりが進出した。

そしてイギリスはだ。当然の如く乗り遅れた。多くの者がロツト

ナー卿を批判した。

「余計なことを言うから」

「全くだ」

「国益を損ねたぞ」

「それでいいのか」

こつ文句をつけるのだった。しかしである。

卿は平気だった。そして言うのであった。

「だが彼等はどうなつた」

「アメリカや中国のことか」

「そつちか」

「そうだ、彼等はどうなったのか」

こう批判者達に言い返すのである。

「その国から忌み嫌われ各国からも白い目で見られているではないか」

進出の結果である。もっともどちらの国もそうしたことを殆どと
いうか全く意に介さない国々ではある。ある意味において凄
いこと
ではある。

「しかし我が国はだ」

「まあそれはありませんでした」

「評判は落としていません」

「むしろ」

考えてみればであった。そうなるのだった。

「そうした狡猾なことをしなかつたせいだ」

「そう、ちゃんとした値段よりも高めで売ってあいてに利益を与
えているので」

「各国から評価されています」

このことは否定できなかった。

「騎士道的だと」

「昔のイギリスからは想像できないとも言われていますが」

実際にはイギリスも歴史的には相当なことをしてきている。この
ことを否定できないことは仕方ないと言っしかないのであった。

第三章

しかしだ。今は、であった。

「では。このことは」

「成功でしようか」

「やはり」

「そうだそうだ」

ここで卿の支持者達が言うのであった。

「ロットナー卿はイギリスの誇りを守ったぞ」

「これはいいことじゃないか」

「素晴らしいことじゃないか」

こうそれぞれ言って彼をフォロワーするのだった。

「ロットナー卿は正しかったんだ」

「本当の国益をイギリスに与えてくれたんじゃないか」

「そうじゃないのか？」

またしても話が二分されることになったのであった。ロットナー

卿のやることは常にこうなった。とにかく前時代的ではある。ドン

＝キホーテである。しかしだった。

その反面そうした人格が評価されていた。こうした人物である。

無論賄賂やそういうものとも無縁で女性を尊重する。紳士でも

あった。

清廉潔白であった。政治家としては稀なまでにだ。そしてだ。

彼は教育者でもあった。常にこう言っていた。

「正々堂々とだ」

自分が理事長を務める学園の生徒達に実に口やかましく言っていた。

「そして折り目正しく。卑怯なことはしないことだ」

「うわ、また理事長が言っているよ」

「騎士道騎士道って」

「女の子にも言うし」
「困るわ」

その女の子達にははっきりと辟易されていた。しかしであった。彼は言い続ける。あくまで。

その結果学校は常に清潔で生徒のモラルは保たれている。遠い日本からも提携を申し出る声があつて来る程度であつた。

その学校とはだ。彼はその提携を申し出る手紙を己の執務室で見つて言う。後ろはガラスが一面にあり下はビロードの絨毯、机と椅子は檜である。何処までもイギリス風だ。

そのイギリスの中でだ。彼は日本からの手紙を見ていた。その彼に執事のアルマーが言つてきた。

「八条学園とはです」

「日本でも有名な学校なのか」

「はい、幼稚園から大学院まであります」

こう主に話していく。主の前に立つてだ。

「そしてどれもかなり大規模です」

「ふむ、マンモス校か」

「はい、そうです」

その通りだといふのであつた。

「そつした学園です」

「そこからの申し出か」

「御主人様のことを御聞きしてです」

「私のか」

「はい、御主人様その騎士道精神を御聞きになられ。あちらの理事長自らです」

「そうか、わかつた」

ロットナー卿は執事の言葉を受けて頷いた。

「それではだ。この申し出はだ」

「どうれされますか」

「受けるとしよう」

そうするといつのであつた。

「あちらが私を評価してくれるといつのならばな。是非な」

「是非ですか」

「受けなくてはなるまい」

「そうだといつのである。」

「だからこそだ」

「わかりました、それでは」

「そしてだ」

彼はさらに言つのであつた。

「日本といえば武士だな」

「はい、かなり廃れているとも聞いていますが」

「しかし日本には武士道がある」

彼は厳しい顔で己の執事に話す。

「それを見てみたいものだな」

「しかし御主人様」

アルマーはいぶかしむ顔になつて主に言つてきた。

「このイギリスで騎士道が最早殆どなくなつているのと同じく」

「日本でもか」

「そう聞いております」

そしてそれは事実であつた。

第四章

「ですから。どうなのでしょうか」

「しかしまだ僅かでも残っている筈だ」

「左様ですか」

「そつだ、今度我が国と日本でのレセプションがあるな」

卿は不意にこのことを思い出したのであった。

「それならばだ」

「それに出席されますか」

「そつする。場所は何処だったかな」

「確か日本でした」

いきなり遠くの話になった。

「そちらです」

「日本で行われるのか」

「日本に行かれたことは」

「いや、ない」

それはなかった。実は彼は元々日本にはあまり縁のない人物であった。本当に今はじめて申し出を受けたと言つてもいい程だったのである。

「実はな」

「ではレセプションには参加されませんか」

「これも縁だ。参加しよう」

これが彼の判断だった。

「是非な。それで話を進めてくれ」

「わかりました、それでは」

「うん、頼んだぞ」

こつしたやり取りのうえで彼は日本に向かった。同時に八条学園と己の学園の提携も進めるつもりであった。そしてそのレセプションは。

まずはだ。彼は顔を顰めさせることになった。

狭い畳の部屋の中でだ。実に窮屈に座っていた。

スーツで足をまげてその上に座ってだ。顔を紫にさせていた。

その周りにいるイギリスの政治家達だ。苦しみに満ちた顔で日本側に尋ねていた。

「あの、これですか」

「そのお話に聞く」

「茶道なのですね」

「はい、そうです」

日本の政治家達は涼しい顔で彼等の問いに答える。

「これがです」

「我が国の文化の一つです」

「ううむ、お茶をこうして飲むとは」

「いや、話には聞いていましたが」

「それでもこれは」

「かなり」

こう言って誰もが苦悶の中にあつた。

それはロットナー卿も同じで。今にも死にそうな顔になっていた。しかし彼は耐えていた。何とかだ。

日本側がこう言ってきたものであつた。

「あの、楽にされても」

「いえ」

ただたどしい日本語での返事だつた。

「それはいいです」

「いいのですか？」

「はい、構いません」

顔を紫にさせながらも。また言ったのだつた。

「これが日本の作法ですね」

「はい」

「そうです」

その通りだと答える日本側の政治家達だった。

「それはその通りです」

「茶道は正座が基本です」

「ならばです。それに倣います」

「こう言うロットナー卿であった。」

「礼儀は守らなければなりません」

「ううむ、凄いですね」

「そこまで仰るのですか」

日本の政治家達は彼のその言葉に思わず唸った。

「イギリスの作法ではないというのに」

「それでもなのです」

「その国にはその国の作法があります」

また言う卿であった。

「ですから」

「成程、よくわかりました」

「そうなのです」

ここで頷いたのは日本の政治家達であった。

第五章

「お見事です、まさに紳士ですね」

「本当に」

「いえ、私は紳士というよりも」

「いうよりも？」

「何だというのでしょうか」

「ナイトでありたいです」

本来の英語が出た。見事なキングズイングリッシュである。

「そう、ナイトに」

「騎士ですか」

「そうですね」

「ナイトというと」

「はい、そうなります」

卿は日本側の言葉に対して頷いて返した。

「私は。そうでありたいと考えています」

「成程、そうですね」

「騎士ですか」

「では騎士としてなのですね」

「はい」

卿は日本の政治家達の言葉にまた頷いてみせた。

「私はこのままいさせてもらいます」

「はい、それでは」

「最後まで御願います」

日本の政治家達も彼の心を受けて頷いたのであった。そうしてだった。

卿は最後まで耐え切った。お茶を飲み教えられた作法を忠実に実行菓子まで楽しんだ。他のイギリスの政治家達がへたれ込んでいるその時もだった。

彼は毅然としていた。そのうえで今は立って日本の政治家達の言葉聞いていた。

場所は日本の庭園である。緑の木々と白い砂浜が見える。池には錦鯉がいて泳いでいる姿が見える。竹が石を打つ音も聞こえる。

痺れる足を何とか動かしながらだ。彼は日本側の話を聞いていた。

「こうしたお庭はじめてですか？」

「どうなのでしょうが、それは」

「如何でしょうか」

「そうですね」

こう一言置いてからだった。卿は答えた。

「何もかもがイギリスのものとは違いますね」

「ええ、これが日本です」

「御気に召されたでしょうか」

「不思議です」

「まずはこの言葉だった。」

「何か。こうした場所は」

「不思議ですか」

「そう仰るのですか」

「はい」

その通りだという卿だった。

「素晴らしいですね。日本も」

「御気に召されたようで何よりです」

「本当に」

「日本文化、これが」

そこにだ。日本の文化も感じていたのだ。

そしてである。彼はふとこの言葉も言うのであった。

「そういえばですが」

「そういえば？」

「何か？」

「武士道ですが」

日本文化を代表する言葉の一つである。以前から興味を持っていたこのことをだ。日本の政治家達に対して尋ねるのだった。

「それは何処で見られますか？」

「武士道ですか」

「それですか」

「はい、それです」

まさにそれだというのである。

「それは何処で見られますか」

「ええと、それは」

「何と言いますか」

「何処で見られるか」というと

「ええと」

「見られますか？」

いぶかしむ言葉になる彼等にまた問うた。

「日本で」

「多分」

「おそらくはですが」

曖昧な返答が返って来た。

第六章

「ええと、剣道場に行けば？」

「柔道場がいいのでは？」

「いえ、居合では」

日本側は武道を話に出していた。

「やはり武士道と言えば武道ですよね」

「ええ、確かに」

「そうなりますよね」

「やっぱり」

「ふむ。日本の剣術や格闘術ですか」

イギリス人であるロットナー卿にとってはだ。剣道や柔道はそうしたものであった。この辺りにも文化の違いが出ていると言えた。

「それにですか」

「ええ、そう思います」

「今から御覧になられますか？」

「そちらを」

「そうですね」

一呼吸置いてから彼等の言葉に返した。

「はい、それでは今から」

「道場に向かいますよ」

「道場という」と

卿はここでも考えた。イギリス人の視点から。

「あれですか。トレーニング場ですか」

「ええ、そんな感じですよ」

「そうした場所ですよ」

日本側はこう応えて説明とした。そうしてであった。

他のイギリスの政治家達と一緒にその道場に向かう。だが途中で

イギリス側の議員の一人がだ。右手を見て言うのであった。

「ほほう、これは」

「どうされました？」

「いや、見事ですね」

見れば右手でラグビーの練習が行われていた。それを見ての言葉だっただけだ。

「本当に」

「見事とは？」

「といたしますと？」

「いえ、いいラグビーをしています」

ここでは英語と日本が交差する。通訳が仕事をしていた。

「まことに」

「そういえば確かに」

「動きがいいですね」

「身体こそ小さいですが」

ここで他のイギリスの議員達も見て話をした。

「いや、日本でもラグビーをやっていたとは」

「しかもこれだけのものとは」

「想像もしてませんでした」

「本当に」

こう話しながらだ。さらに見ていく。するとだ。

そのラグビーの練習を見てだ。ロットナー卿も言った。

「ふむ、これは」

「まあ日本もラグビーはしています」

「一応ですが」

日本の議員達の言葉は今一つ歯切れがよくなかった。

「しかしです」

「やはり貴国やオーストラリアには適いません」

「いえ、そういう問題ではありません」

卿はその彼等にこう返したのだった。

「それとはです」

「といたしますと」

「どういうことですか、それは」

「一体」

「ですから。勝負の問題ではなく」

「彼はその歯切れの悪い彼等に話す。」

「どれだけ正々堂々と。毅然としてしているかです」

「それですか」

「それなのですか」

「はい、そうです」

「まさにそれだというのである。」

「ですから」

「ですから？」

「何を」

「一つ提案したいことができました」

「こう日本の政治家達に話す。」

第七章

「貴方達の中でもラグビーをされる方はおられますか？」

「ええ、まあ」

「一応は」

日本の政治家達は彼の言葉に正直に答えた。

「している者もそれなりにいます」

「総理大臣関係者にもいますし」

「そうですね。それならです」

このことも聞いてだった。卿はさらに話した。

「では」

「はい、では」

「何を」

「私達もラグビーをしている者が多いですし」

伊達にラグビーの本場ではなかった。はじめはサッカーの試合中にラグビー校の生徒がボールを脇に抱えてサッカーゴールに突入したことにある。ラグビー校はイギリスの名門校の一つである。

「ですから。是非」

「あの、剣道は御覧になれないのですか？」

「柔道も」

日本側はこのことにこだわっていた。

「それはないのですか？」

「宜しいのですか？」

「いえ、それも見させてもらいたいです」

それはだというのであった。

「しかし日本のラグビーをです」

「御覧になられたい」

「そうですね」

「是非共。宜しいでしょうか」

ロットナー卿はまた言った。

「それで」

「そうですね。それでは」

「そこまで仰るのなら」

「やりましょう」

日本側もここで頷いた。これで決まりだった。

次の日。日英の政治家達はそれぞれラグビーのユニフォームを着てグラウンドに集まった。無論その中にはロットナー卿もいる。

彼はだ。イギリス側を代表して日本側に言った。

「それではです」

「はい、それでは」

「これからラグビーをですね」

「やりましょう」

笑顔で言っていた。それがはじまりだった。

試合は親善試合であった。だが白熱した試合になっていた。体格で劣る日本側はフットワークを駆使して戦う。イギリス側はパワーで押す。

勝負は結果としてイギリスの勝利だった。フットワークにしても彼等の方が上だった。伊達に発祥の地ではないということであろうか。

しかしだ。ロットナー卿は敗れた日本側にだ。こう言うのであった。

「有り難うございます」

「有り難う?」

「有り難うですか」

日本の政治家達は誰もが肩で息をしている。年齢のせいだった。ラグビーというものはサッカー以上に激しいスポーツだからだ。

そしてそれはイギリス側も同じだった。しかしロットナー卿だけはだ。汗をかきながらもそれでもだ。毅然とした態度のままであった。

その態度でだ。日本側に礼を言ったのだ。
そしてだ。その理由も話すのだった。

「見せてもらいました」

「何をですか？」

「一体」

「騎士道をです」

それをだというのだ。

「貴方達は私の申し出を受けてくれましたね」

「ラグビーをですか」

「この試合のことですか」

「はい、まずはそれです」

まずはというのであった。

「無理な御願いですが受けて下さいましたね」

「まあそれは」

「親善ですし」

「ですから」

これが日本側の返答だった。

「当然ですから」

「これ位は」

「そしてです」

卿はその彼等にさらに話した。

第八章

「その試合もまた」

「試合もですか」

「それもなのですか」

「はい、試合もです」

それもだというのだった。

「見せてもらいましたし」

「それで」

「私達の中に騎士道精神とやらをですか」

「正々堂々と卑怯なことはせず」

こう話す。

「相手を尊重して戦うことができます」

「それが騎士道精神」

「そうですね」

「スポーツマンシップとも言いますか」

卿はこの言葉も出した。

「確か。日本では武士道でしたね」

「これはラグビーですが」

「それでも武士道があるのですか？」

「そういうものですか？」

「騎士道は何にでもあります」

卿は騎士道から話した。

「そう、茶道にもこのラグビーにもです」

「だからですか」

「それで」

「日本の騎士道ですね」

武士道のことを言っていた。

「そうですね」

「そうなりますかね」

「言われてみれば」

日本側の返答は今一つはつきりしなかった。いぶかしむものだった。

「武士道も騎士道も」

「同じですか」

「はい、同じなのです」

「そうなのですか？」

「あまりそうは思えませんが」

いぶかしむ言葉を出す彼等だった。

「そうですね、それは」

「武士道と騎士道はまた別では」

「つまりはです」

そのロットナー卿が話すのだった。

「正々堂々と正面からです。何事も行い」

「正々堂々と」

「正面から」

「そうですね、そして決して卑怯なことはしない」

「このことも話した。」

「それが騎士道なのですから」

「武士道もそれは同じ」

「そうだからですか」

「そういうことです。日本にも騎士道はあります」

卿はこう言い続ける。

「そのことを見させて頂きました」

「納得してくれてるみたいだな」

「そうだな」

日本側はとりあえずそれでいいのではないかと思った。

それで特に強くは言わなかった。興がそれで納得しているからだ。それに彼等にしてもだ。考えてみるとだ。

「その通りかな」

「そうだよな」

「一応そうなるよな」

何となくだが納得したのであった。

そしてそのうえで交流を続けた。双方にとって満足すべき結果になった。

第九章

ロツトナー興もだ。満足した顔で帰国した。そうしてだった。執事のアルマーに笑顔で話した。

「日本はいい国だね」

「御気に召されましたか」

「うん、騎士道がある」

彼にもこう言った。

「とてもね。だからね」

「だから？」

「また行くよ。勿論八条学園との提携もね」

「受けられますか」

「是非ね。こちらから頼みたい位だよ」

そこまでだというのだった。

「本当にね。それじゃあ」

「はい、それでは」

「今から食事だけれど」

その話になった。

「日本の食べ物がいいかな」

「日本のですか」

「うん、刺身だったかな」

話に出すのはそれであった。

「それがいいかな」

「刺身とは」

「魚を生で切ってそれを醤油で食べるんだよ。日本のソースだね」

「ふむ。変わった食事ですね」

「話には聞いていたけれど見るのも食べるのもはじめてだったよ」

彼はそれまで和食には疎かったのだ。それで、である。

「けれどね。これがね」

「美味ですか」

「うん、美味しかったよ」

「こうアルマーに話す。」

「だからね。今からね」

「畏まりました。それでは」

「レストランに行こう」

「そしてそれから」

「三時お茶もね」

ティータイムについても話す。イギリス人の風習の一つだ。彼等はその時間になると紅茶を楽しむようにしているのである。紅茶は彼等の友人だ。

「緑茶にしようかな」

「緑茶？緑ですか」

「これも日本のお茶だよ」

「こうアルマーに話す。」

「それにしようかな」

「ふむ、面白そうですね」

「これも日本のレストランで飲めたと思うし」

「左様ですか」

「飲むでしょうか」

「こう話しながら笑顔になっていた。卿は明らかに上機嫌であった。その上機嫌のまま。さらに言う彼だった。」

「騎士道は他の国にもあつたんだ」

「日本にも」

「やはりまだ廃れてはいない。私も頑張らないとな」

「こんなことを言っていた。彼は以後もその騎士道を守り行っていた。それは永遠に残すべきものである、そう信じてである。」

2
0
1
0
·
9
·
2
7

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2563p/>

騎士道精神

2010年12月1日21時40分発行